

---

# ボクは夢をみる

洗井 あい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ボクは夢をみる

### 【Nコード】

N2146A

### 【作者名】

洗井 あい

### 【あらすじ】

高校生のリヨウと大学生のハルキは付き合い始めて、まだ1ヶ月。相思相愛な二人だけど、最近ちょっとすれ違いの日々が続いていた。ハルキの事で悶々と考え込むリヨウの視界に入ったのは、進学クラスの優等生ミナミ。気になっていた彼女と友だちになったのは良かったけれど、その彼女の本当の素顔を知って驚愕する。

## ボクユメ1

夢だ。

絶対に、コレは夢。

それも、絶対フツの夢だから、大丈夫だって、絶対、そんなことあるわけ無いから・・・

夢の中で、ハッキリと自分の意識を自覚しながら、教室の机で泣いている、自分に言い聞かせる。

しかも、授業中だぜ、オイ！古典かよ・・・イツだっけ、古典・・・ああ、だからコレはただの夢だから大丈夫、心配すんなあ。

でも・・・夢でも、あんまりだよ、授業中にこんなの。

いきなり鳴ったケイタイのバイブ。

メール・・・ハルキからだ。自分からメールなんてしないのに、昨日のがよっぽど良かったのかなあ。

タベのHを思い出してニヤケながら、その無題のメールを開けた。

『女できたから、リヨウとは別れる。』

「え！なに、コレ！」あ・・・なんか、コレ夢だ、叫んだのに誰一人気づかない・・・だから、いつものように夢だってスグにわかったけど、スゲーショックなんですけど。

マジ？ハルキ、いくら夢の中でも自己中すぎない？いや、現実のハルキはもつと自己中だな。

夢の中の授業は淡々と続いていて、クラスのヤツ等誰一人としてオレの様子に気づいていない。

そうだよ、夢だもん。

今ココで大泣きしたって、誰も気が付かないし、恥ずかしくもなからう。

泣いちゃえ！

『ハルキのバカヤロー、酷いよメールで別れ話なんて、オマエなんか大嫌い！』

ばかばかばかー、大好きなのに！もつともつといっぱい一緒にいたいのに！」

泣いて泣いて、鼻水垂らして激しく叫んでんに・・・やっぱ、誰も気が付かない。

それはそれで、ちょっと悲しいかも・・・「どうしたの？」って声も無しかよ。

あーあ、なんか泣き疲れちゃった。

夢だってわかってたって、心の傷は相当なもんだ。本当にハルキからこんなメール来たら、死んじゃうかもしれない。オレは大きなため息と共に、机に突っ伏していた。

窓の外に広がる暗い雨雲・・・オレの心を表現してんだな、きつとあと少しで大粒の雨が降ってくんだろう。無理矢理起きちゃおうかな、でも、そしたら目覚めが悪すぎて1日憂鬱になちゃうもんなあ。少しはハッピーに転換していつてほしい。

『ねー、どうした、コネコちゃん。飼い主に捨てられちゃった？』え？急な声に顔を上げると、どこかで見たことのある、見覚えのある・・・澄んだアーモンド形の瞳が、目深にかぶったキャップの下から覗いていた。だ、誰だっけ・・・

『きつと雨が降ってくる。ココにいたら濡れちゃうよ。良かったらウチに来ない？』

どこで聞いたんだろう、聞き覚えのある透明感のある涼やかな声。たぶん、学校のヤツ？でも、こんなカツコイイヤツいたっけ？そんなヤツいたら、見逃すはずないし・・・その手がオレの身体を持ち上げ、その腕に優しく抱いた。

ん？オレ、仔猫になってる？「あんた、ダレ？」って一生懸命叫んでも『ミャーミャー』鳴いてるだけなんだもん。本当、夢ってオモロイ。落ちないように踏ん張ったら、オレの爪がその人の肌に少し食い込んだ。「ゴメン、痛かったよね。」って謝ってもネコ語だけだ。

『ん？大丈夫、このくらい。』

そう言って、その人はオレの頭を何度も撫でたんだ。

## ボクユメ2

「ふうー」

なーんかなあ、なんだかなあ・・・最近、ハルキ冷たいんだよなあ。ゼミで忙しいのわかってんだけど、メールくらい返信してくれたいいいじゃん。自己中ハルキだからしょーがないけどさ、この前の夢みたいになったらヤだし。でも、なんか心配でさあ、休み時間の度にメールチェックしたりする自分、ああ、けなげすぎる。

自分でもわかんないけど、オレの好きになっちゃう人って、最近はみんなオトコ。もちろん、オンナとだって付き合ったことはあるけど・・・最後まで、シタことはない。オンナとスルってイイみたいなんだけど、生憎そのチャンスがまだめぐってこないみたい。ま、そのうちにつて思ってたんだけどね。

だからオレの恋愛って、相手が相手だけに、だいたいが苦しい気持ちを抱えるわけだけど・・・3日前に見た、あのリアルな夢が脳裏に焼付いてて、精神状態ヤバめなわけ。

あの夢の続き、残念なことに覚えてないんだ。ネコになって抱き上げられて、たぶん連れ去られたんだろうな。あの人、本当にいたらイイのに・・・「はぁー」ため息と一緒に机に突っ伏した。窓の外は、青空だ。オレの心は曇り空って感じなのにな。

3階の教室の窓から見えるといったら、空、3階建ての体育館の2階フロア、見下ろすとレンガで敷き詰められた中庭。それだけ・・・敷地が狭い街中の高校だから、しかたないよな。体育館をグルリと取り囲むように校舎が4棟建っていた。お陰で、グラウンドが存在しないから・・・体育嫌いなオレにはありがたい。

良かった、生物の時間で。この先生、テストで点さえとれば授業中の態度はどうでもいいみたいな先生だから。オレがこうやって寝た振りして外を眺めてたって、無関心だもん。

ふと見た見た体育館、女子クラスがダンスしてる・・・ウチの学校、

前は女子高だったんだよね。だから、女子のが圧倒的に人数が多い。部活も女子のが全国行ってるし、あ、エイコだ・・・ってことは国立コースのいけ好かないクラスか・・・普通科を見下してる、ヤなクラス。

でも、1人だけあのクラスなのに毛色の違った子がいたっけ。ほら、体育館のガラス窓に寄りかかっている子。名前、なんだっけ・・・えっと、そう都築さん。けっこー、目立つんだよね、背が高くて、キレイで、それでなんかクールな感じだから。彼氏、いんのかなあ。あの子だったら、シテもいいよなあ、・・・なんて、許してハルキ。あ、エイコ、意味ありげにニヤニヤしながら、カノジョに近寄ってきた。あの女、ちょーム力つくんだよねあ、お嬢様だかなんだか知らないけど、ホント、バカ女の部類ネ。

その二人の様子を観察していたオレは、ちよつと意外な方向性にピクリと反応していた。どう見たって、なんかエイコのヤツ、都築さんに気がある素振りっていうか、どうなのその雰囲気。ペツタリと寄り添うって感じですかねえ・・・あいつ、そっち系だったんか？都築さんの少し迷惑そうな横顔が、こっからでもハッキリと見て取れた。またマイペース發揮してんのか、エイコのヤツ。カノジョの腕を引っ張って無理矢理床に座らせると、その耳元で何かをささやいていた、今にも唇がその耳に口付けでもしそうな程に顔を寄せ・・・

けれどカノジョは迷惑そうに立ち上がると、フロアを背に、こっちの、オレの校舎の方を向いて、うんざりした顔をしていた。それでも執拗にカノジョの腕に手を絡めるエイコの品の無い態度が、盗み見るコツチも不愉快にさせる。いい加減、諦めろって、脈ないんだから・・・オレは苦笑してしまう。

無関心を決め込んだのか、それとも話すのもイヤなのか、カノジョはエイコを無視していた。エイコの形相がみるみる強張って、怒りがその態度にも表れ始めると、やっと大きいため息について、真っ直ぐにエイコの瞳を見つめていた。その途端、エイコはヘナヘナ

と力が抜けてしまったようで、だらしなくカノジヨにしな垂れた。

疲れたように空を仰ぎ見たカノジヨが・・・戻した・・・視線の先に・・・オレが・・・いた。

ヤベ、見つかった！

慌てて視線を反らしたけれど、カノジヨの視線を後頭部に強く感じていた。

その視線の痛さにいたたまれず、もう一度、おずおずとカノジヨに視線を戻す・・・

するとカノジヨは、愉快そうにニヤリと笑ったんだ。



### ボクユメ3

うわぁー、すげー気持ちいい。

何がつて、盗み見てたのバレバレじゃん。オレが何組かバレバレだし、後で呼び出しとか無いことを祈るって感じなんだけど・・・待てよ、別に自分が悪い事してたわけだし、何ビビッてんのよ。相手、オンナだし。挙げるとしたら、カノジョの存在意識してた自分の浮気心つてところ。

それにしてもビックリだよなー、エイコとそんな関係なんだ、カノジョ。

趣味悪いぞ、オイ。

オレは、むず痒くなつた頭をボリボリと掻いた。

「田辺えー、昼、上で食べね？みんな行くつて。」

「あー、行く行く。」

5分早く終わった、生物の授業。クラスの友だちに誘われて、ガーデニングされた屋上へと向かった。

各校舎の屋上を緑化して、生徒に開放してくれてるところ。ま、高く張られたフェンスはいたしかたない。

他のクラスの授業は続いていたから、オレらは流水脇の一番いい場所に陣取る事ができた。

「なんか、金魚、デカクなつてね？」

「うわ、デカ！みんなエサやりすぎなんじゃね？」

10センチ位に大きくなっていた金魚は、オレらが祭りの時に金魚すくい取って来たやつだった。

案外、ウチのクラスって仲良かったりするんだよな。みんなで祭り行ったり、映画行ったり、バーベキューしたり。来年は持ち上がりだから、余計に仲良くしなきゃって気もしたりする。

この週末も、何人かで風呂入りに行く約束していた。

「さつき、授業中にさぁ・・・」

と、オレが弁当を広げながら、クラスのヤツにエイコの話をしようとした矢先・・・例のカノジョが、オレの視界の中に、突然現れた。ヤバ・・・とっさに、口をつぐんで視線を落とす。き、気が付きませんように・・・けど、カノジョは真っ直ぐにコチラに向かつて歩いてくる。あー、オレらの前で立ち止まって・・・ヒイイ。

「ノリ、かくまって！」

「なにい、ミナミどうしたのー、もしかして・・・アイツ？」

「そっ！いい？」

隣でメシを食っていたクラスのノリに、カノジョは後ろを気にしながら拝むように頼んだ。

オレなんてまるで眼中にないかのように、急いで流水の後ろに身を潜めていた。それを更に隠すかのように、オレらがガードするわけね、納得です。

「田辺え、もう少し後ろ下がってあげてよ。」

「ああ、うん。」

ノリはテキパキとクラスの連中に指示して、カノジョをかくまう手はずを整えた・・・のが早い・・・  
出た！エイコ登場だあー！

「ねー、田辺えーミナミ来なかった？」

「はあ、だれ？」

エイコ、なんでオレなんだよ！オメーの知ってるヤツは他にいんだろ。高橋とかミキとかのが、知り合いなんじゃねえの？クラスのヤツらの顔に、一瞬、緊張が走っていた。

オマエら、ちゃんとフォローしろよ！

「ウチのクラスの都築ミナミ、知ってるでしょ。一番キレイな子！」

「あー、髪、短くて背の高い子？」

少しイライラしたように腕組みしながら、エイコはオレらの顔を見回した。

もしかして、バレてるか？

「そう、こっち来なかった？」

「いや、見てないけど・・・来たの見た、ノリ？」

オレがノリに振ったのが・・・まずかった？

ノリは、急に立ち上がって、エイコにツカツカツと詰め寄った。

アララ・・・

「アンタさ、勘違いしてんじゃない？」

ミナミが、アンタなんかマジで興味持たないじゃん。

ミナミだって迷惑してんだから、しつこく付きまとうの止めなつて

」

なんでよ、そこまでノリが言わなくても。

もしかして、いわくアリ？この二人って・・・怖い。

「アンタに何がわかんのか！ほつといてよ！！」

エイコは、キツとオレを睨んで・・・なんで、オレよ！

スゲー悔しそうにきびすを返すと、屋上から走り去った。

その場に異様な緊張感が漂う・・・うわぁ、何よこの雰囲気・・・

事情を知ってるらしい数人が、コソコソと何かを話していた。

「ミナミ、行ったよー。」

今さっきとはうって変わって、明るい口調でノリは言った。

「サンキュー、ノリ、助かった。」

もーさー、毎日、あんなじゃん、キツイんだよねえ。トイレにも1

人で行けないんだよ。

さっきの体育のときもさぁ、ね、タナベくん？見てたでしょ、あんな

なだもん。」

「う、うん・・・」

どう、返答すればいいってんだよ！

カノジョはオレの隣にドカッと腰を下ろして、軽快に話をする。

オレの気まずさなど、お構い無しに。カノジョってこんなキャラだ

ったんだ・・・そっちのがビツクリ。

「ミナミ、エイコには気をつけた方がいいんじゃない？」

「んー、わかってる。」

「アタシはさぁ、アンタのことわかってるつもりだけど、アイツは

わかってないじゃん。」

「んー、出来れば・・・わからないで欲しいかな。」

アハハハって笑う数名の女子・・・なに、なに？やっぱわけアリなの？ちよつと気になったりしてる。

ふつとカノジヨが動いた時に薰ってきた紅茶のような香りが、オレの鼻腔をくすぐる。コロソ？ほつとするような、そんな香りだった。エイコもこの香り、嗅いでたんだな・・・さっき。

「ミナミ、お昼は？」

「あ・・・まだ・・・ノリい、ちよつと頂戴」

遠慮なく手を出してみせるところ、ちよつとカワイイかも。

ホ力のクラスに混じって昼メシ貰うつても、なんかオカシイかも。国立コースのくせに、この子、ちよつと変わってるかも。

「しかたないなあ、オニギリ1個あげる。ほら、田辺えもカラアゲあげなよ。」

「う、うん、ハイ。」

「サンキュー、田辺くん。」

すっかり名前憶えられちゃったって？さっきまでの気まづさが消えて、オレは案外居心地よく弁当を食べ始めていた。すぐ隣にカノジヨが座ってるのも、なんか嬉しいし・・・ノリのお陰で知り合いになれたのも、ラッキーって感じ。

だって、オレ・・・前から少し気になってたんだよね、この子のこと。

## ボクユメ4

相変わらずハルキからは、メールが無かった。なんだよ、もー。さつき、弁当の後に「なにしてるの？」ってメールしたのに・・・少しぐらい、相手にしてくれたっていいじゃん。電話しちゃおうかな・・・でも、ウザいか？夜はバイトだし、今の時間ならいいよね。「田辺、オレら行くよー。」

「あ、オレ、電話してから行くから、先、行つてー。」

オレは、なんだか急にハルキに甘えたくなって携帯に電話した。5回、コールが続く・・・切ろうと思った矢先、大好きなハルキのちよつと擦れた低い声が返ってきた。近くに知り合いはいないな・・・

「もしもし、リョウ？」

「うん、今、平気？」

「いいよ、どうした？」

久しぶりに聞いた声に、胸が熱くなる。だって、我慢したんだもん、忙しいって行つてたから。

だから、あんなやな夢まで見ちゃってさ、妙に不安っていうか落ち着かなくてさあ。

「だって、メールしても返事こないから・・・」

「ゴメンゴメン、教授が学会近くてさあ、その準備してんだ。メールは見てるよ。」

その言葉に嬉しくなつて、頬が自然にほころんでいた。メールは見てくれてる、それがわかっただけで満足なんだ、オレって単純。

「うん、わかつてる、ちよつとハルキの声が聞きたかっただけ。」

「週末、何してる？」

「えつと、土曜日はクラスのヤツらと風呂行こうって約束してんだ。」

「じゃ、日曜日は空けとけよ。」

あー、失敗。約束入れるんじゃないかった・・・でも、学校の友だちと遊ぶのも大事だ、ってハルキは言ってたもんな。オレが友だちと遊んだって、オンナみたいにやきもちやかないし。

「うん、わかった、またメールするね。」

「返事できないけど、いいか？」

「読んでくれてるってわかったから・・・それじゃあ。」

「りよう。」

「ん？」

電話を切ろうとしたオレを呼び止めたその声に、身体がビクンと震えた。

「好きだよ。」

「うん、オレも。」

ああ、だからオレ、ハルキが好きなんだ。いつもは素っ気無いくせに、自己中にしてるくせに、本当はスゲーオレのこととか気遣ってくれる。今、身体中、幸せ一杯。無意識に、フェンスをギュッと握り締め1人身悶えていた。

「ふーん、田辺くんは・・・ソツチOKなんだあ。」

「え！」

背後からの急な声に、ビクッと身体が反応した。

だ、だれ？ いや、だれって話じゃない、カノジョだ！ フェンスを握り締めていた手のひらが、ジツトリと汗ばみ冷や汗が背中を流れ落ちる。恐る恐る、声の主の方へと振り返った。

「ハイ、これ。さつき、オカズ食べちゃったじゃない？ 足りないでしよ、アレじゃ。だから、コレ食べてよ。」

「都築さん・・・」

「サンドイッチ、いらなかったら捨てちゃって。」

「ずっと、聞いてた？」

「んー、電話？ えっと、声が聞きたかった・・・ってあたりから。電話の声、漏れてたし。」

まったく悪びれる様子も無く微笑んでサンドイッチを手渡すと、わ

ざとらしくオレの隣でフェンスに寄りかかった。このオンナ、何者？てか、バレた？オレがオトコと付き合ってるの・・・こめかみに、タラリと汗が流れた。

「ま、私も・・・そっちOKだからさ。」

「え？」

「学校じゃ、ビアンだって思われてるし、それもアリかなーって。」  
「バイなの？」

「そうかもね、よくわかんないけど。」

「やっぱ、やっぱ、変、この子。オレが惹かれたのって、コレだったのかもしれない。カノジヨが持つてる、独特の匂いっていうか、いや自分と同じ匂いってやつ・・・人は見かけによらないってこのことね。」

そんなことより、オレの秘密がバレちゃった・・・どうしたらいいの？

「なんか、不安？」

「だって・・・」

「そういう話って、個人的なことじゃん。私みたいに、知られてるヤツもいるけど・・・その煩わしさってわかってるし。私を信用しろ、とは言わないけど。」

「うん・・・」

不安だよ、そりゃ。不安で胸が一杯。さっきまでの幸福感はどこへやら、カノジヨに、そうカノジヨにバレたショックで、オレの頭の中パニック状態。

「ほらほらー、そんな捨て猫みたいな情けない顔しないの！」

「え、今・・・なんて・・・」

「捨てられた仔猫みたいだよ、田辺くん。なんだったら、拾ってあげようか？」

「うわぁーーーーー、あの夢って、これのこと??」

すっかりパニックってるオレを面白そうに見つめて、カノジヨは言った。夢の中と同じアーモンド型の眼が、じっとオレを見つめている。

でも、夢の人は絶対にオトコ、見間違えるはずもない・・・それに、声はもっと低かったもん。

「じゃ、エイコに見つかったみたいだから、行くね。」

2メートル先に、仁王立ちのエイコ発見。

ひどく誤解されてる気がするんですが・・・オレとカノジヨは、まだなんの関係も無いぞ！

そう言ってやりたかったけど、この口から出た言葉は・・・

「都築さん、放課後、ヒマ？」

「学習室にいるかな。」

カノジヨは苦笑してそう言っくと、エイコにがつちりと腕を取られて行ってしまった。

なんか、スゲー嫌なオナナに捕まってないか？カノジヨ・・・可哀想に・・・なあ。

カノジヨの不幸に同情しながら、エイコの強引さには笑うしかない。エイコに見つかったらコワイけど、オレは、もう少しカノジヨと話してみたいと思っていた。



## ボクユメ5

「放課後に」と、都築さんと約束はしたけれど、カノジヨは学習室にはいなかった。

代わりに、帰ろうとしたオレを校門で待っていたのは、あのエイコだった。

ついてねえー。

「田辺え、あんたミナミと何かあるわけ？」

「はあ？別にい。」

なんだコイツ、オレにまで嫉妬してるわけ？

オマエ、その勢でカノジヨとしゃべったやつ全員に、イチャモンつけてんのか？

これだから、オンナってヤなんだよ、見苦しいってのに。

「じゃあ、なんで放課後なわけ？」

「関係ねーだろ、オマエこそカノジヨと何なんだよ。」

オレのその質問に、言葉に詰まったエイコ。

視線を落として、小さくため息をつく。

やっぱ、恋してんだな、コイツも。

オレとエイコは、近くの公園へ向かって歩きだした。

ありえねーシチュエーションだったけど、エイコの乙女心に付き合うのは中学からの縁だから。

「オマエ、カノジヨが好きなの？」

「ダメ？」

「ダメじゃないけど・・・」

お嬢様でお姫様なエイコが見せた、その苦しげな恋の表情がオレの気持ちとカブる。

高飛車な態度で敵無しみたいなオマエでも、そんな顔するんだな。

少しばかり親近感も覚えたけど、それだけ。

同情はしないぞ。

「他のヤツとは違うのよ、ミナミは何か違う・・・だから、つい・・・」

「ダレにも渡したくない！ってか？」

「そんな感じ。」

それって、ドツボにはまってね？恋愛初心者みたいな・・・あ！コイツもしかして・・・

自分以外の誰かを好きになったの、初めてとか？

「付き合ってたの？」

「・・・。」

エイコはうつむいて、首を横に振った。

恋の空回りってヤツか。

好きな相手に振り向いてもらえないもどかしさ、とか  
いつそのこと、嫌ってくれればいいのに・・・ってヤツ。  
ありがち。

「他のオナナとしゃべってんの見ただけで、チョーム力つくんだよね。」

「だからって・・・。」

「わかってるよ、でも、無視できないもん。」

あらら、重症。

カノジヨもハッキリしてやればいいのに、こんな状態は苦しいだけでエイコが可哀想だ。

それをしないカノジヨに責任がある、とオレは思った。

「私の事なんか、同じクラスの友だちとしか思ってたない。」

「わかってんじゃん。」

「だけど、私の気持ちはどうすればいい？」

それをオレに訊くのかよ。

オレに訊かないで、直接カノジヨに訊くべきなんじゃねーの？

そう思ったけれど、口には出さなかった。

エイコの切なさ、オレにも十分理解できるから。

「こんなに好きになったの、初めてなんだ。」

田辺えも知ってるでしょ、私の性格の悪さ。

自分じゃ変えられないけど、ミナミなら変えてくれる気がする。」

「恋すると、人って変わるんだな・・・」

「え？」

「オマエ、ずいぶん変わったじゃん。」

エイコはポカンと口を開けて、オレを見た。

なんだよ、自分が少し変わったことに気が付いてねえのか？

しょうがねえなあ、意外にドン臭いのな、オマエ。

「ま、ストーカーみたいな真似は止める事だな。」

カノジョも迷惑だろうし、それにオマエ自身も傷つくんじゃない？」

「ストーカーなんて・・・」

「十分、ストーカー入ってるって。ヤベエって思ったもん、お昼の時。」

「マジ？」

うなだれるエイコは、さっきまで自分自身を見失っていたんだ。

自分の中の欲求に突き動かされて、ソレに忠実に従った結果がコレ。気持ちに馬鹿正直すぎんだよ、オマエ。

「嫌われたよね、きつと。」

「どうかな。カノジョ、迷惑そうにはしてたけど、キライだとは言  
ってなかったぞ。」

「ホント？」

「たぶん。本人に謝って、ちゃんと訊いてみれば？」

立ち直り早えー。

うらやましいくらい、オレなんか夢にまで見ちゃうのにさ。

瞳を輝かせて、さっきとはうってかわった自信に満ちた、いつもの  
エイコ。

もう少し、凹んでもらったほうが良かったかしんね。

「田辺え、なんかゴメンね。」

「ま、エイコもさ、少し冷静に周りみたほうがいいぞ。」

「そうする。」

公園のベンチにオレを残し、

背筋を伸ばして颯爽と歩き出したエイコは、いつものお嬢様に戻っている。

コイツはやっぱり、こうでないと。

実際、オレはエイコをそんなにキラリじゃないんだ。

周りがどんなに非難めいた事を言っても、コイツは揺るがない。

自分を強く持てるのを、少なからず羨ましく思ったりもするんだ。ただ、コイツの場合、その度が過ぎるってのが反感を買う種なんだけどね。

「そうだ、田辺え、マジでミナミとはどうなのよ！」

「なんだよ、疑ってんの？オレ、今日、初めてカノジョと話したんだぞ。」

「そ、ならいいわ。少しぐらいならいいから。でも、ミナミにちょっとかい出さないでよ！」

いつになく意地悪い口調で言ったけれど、その顔はいつも以上に可愛らしく見えた。

恋のチカラって、やっぱりスゲーんだな。

底知れないパワーっての？与えてくれるんだもん・・・恐ろしいくらい。

オレはノロノロと立ち上がって、1人、駅に向かった。

そして、学校帰りの学生で溢れた駅前で、オレは自分の目を疑った・・・コレも夢？

## ボクユメ6

「ハルキ？」

あんなに忙しいって、まだ大学にいるはずじゃなかった？  
バイトだって、7時からじゃん。

目の前のコンビニかた出てきたハルキを見つけたオレは、  
声を掛けることも忘れ、その場に立ち尽くした。  
だって……

『ハルキー、今日もウチ、泊まるの？』

『ダメ？』

『別にいいよ、誰も来ないし。』

え！？どういう事？もしかして、他人の空似？

でも、一緒に居るのって……一緒にコンビニから出てきたのって・  
・

震える手で、携帯を握った。

その二人の、後姿を見つめながら。

オレに背を向けて、目の前から遠ざかって行くその人から、聞きな  
れた着メロが流れてくる。

「もしもし、リヨウ？」

「ハルキ、今、どこ？」

「んー、ちよつと外。」

携帯から、同じ雑踏が聞こえてくる。

近くを通った、救急車の音まで。

「ん、わかった、またね。」

事実を前に、震える指が一方的に携帯を切った。

冷静な自分の声に、オレ自身が驚いている。

その事に気が付いたハルキが、周りを見回している。

ハルキに見つかる前に、この場を立ち去るしかないだろ、早く！  
勝手に走り出した脚は、人込みの中へとオレを隠してくれた。

遠くで名前を呼ぶ声が微かに聞こえたけれど、今は何も聴きたくない。

手に握られた携帯は、電源を切るまでずっと鳴り続けていた。なんで、なんで、カノジョなんだよ！！

惨めな気持ちを抱えていた。

エイコにあんなエラそうな事いつた自分が、馬鹿みたいだ。オレだって、同じじゃないか、同じ過ちを犯したじゃないか・・・エイコと別れた、公園のベンチにずっと座っている。

どこに逃げ込んだらいいかわからずに、たどり着いたのはココだった。

電源を切った携帯は、ずっとオレの手の中に握られたまま。

届くはずの無いハルキからの連絡を待っているなんて、馬鹿だ。

好きだから、好きだから・・・自分だけを見ていて欲しいから・・・

だから、こんなに苦しくて切ない想いを胸に抱かなきゃならない。ハルキ、アレはヒドイよ・・・マジで。

眼にした事実が、頭の中で何度も何度も繰り返されていた。

コンビにから出てきたハルキ、そしてカノジョ・・・都築さんが。

二人が知り合いだなんて、知らない。

カノジョの家に泊まってた？

今日も、泊まるの？

・・・そうだ、親戚かなんか。

それをハルキに確かめるなんて・・・出来ないよ。

時間だけが、オレを残して過ぎていった。

公園の外灯が、ボンヤリと灯り始める。

ホント、何なんだよ・・・コレ、こんなのアリ？

遠くで・・・雷鳴が轟いていた。

こうして座っていたら・・・

この惨めな気持ちを、洗い流していつてくれるんだろうか？

「ねー、どうした、コネコちゃん。飼い主に捨てられた？」

え？

その声に顔を上げると、見たことのある・・・  
澄んだアーモンド形の瞳が、目深にかぶったキャップの下から覗いていた。

「きつと雨が降ってくる。ココにいたら濡れちゃうよ、良かったらウチに来ない？」

どこで聞いた事のある、セリフ。

聞き覚えのある、涼やかな声。

その手が、オレの方へと伸びてきたけれど、とっさにその手を払いのけた。

差し伸べられた救いの手の甲に、赤く血が滲んだ。

「あ・・・」

「ん？大丈夫、このくらい。」

「ヨシヨシ。」、そう言つて、頭を優しく撫でるな。

でも・・・なんだろう、この感覚。

冷え切っていた胸の中に、血が通う感じ。

「誤解したまま、逃げ出すなよ。」

「・・・。」

オトコのような声で、話し方で、オトコのような身なりで。

いや、どう見たって、こいつ、オトコだ。

目深にかぶったキャップ、洗いざらしのシャツ、汚れたジーンズ。  
ちよっと人目を引くのは変わらないけれど、

今、目の前にいるのは、オレの知ってるカノジョじゃなかった。

## ボクユメ7

「オレとハルキは、前からダチなんだ。」

ハルキはオレの良き理解者ってとこかな、わかるだろ。」

訳もわからずにいるのに、何をわかれていうんだよ。オマエの言ってることを、鵜呑みにできるか。ムカついて無言のまま、その横顔を睨み付けた。

「わかんないか・・・んー、オレさ、身体はオンナだけど、脳みそはオトコなわけ。」

しってるだろ、そういう人間がいるってこと。テレビで見たこと無い？」

あるけど・・・あるけど、そんなのが近くに居るなんて想像できない。それに、オマエの言ってることが本当だって事、どうやって立証すんだよ。そんな眼に見えない事、どうやってわかれていうんだよ。」

「信じらんないよね、こんな話し、いきなりだもんな。誓って言うけど、オレはハルキとやってないから、マジで。ダチと付き合うほど、飢えてないし。第一ハルキは、オレのタイプじゃないしさあ。どっちかっていうと、田辺くんのがタイプ・・・あれ、それじゃダメ？」

なんだよ、コイツ、ちょー訳わかんね！オレは、一体、何を信じたらいいんだよ。」

雷鳴はどんとコツチに近づいてきているようで、どんよりと曇った夜空が、ところどころ明るく光る。湿った風が、オレたちを吹きつけ始めた。

「参ったな・・・話しても、無駄って感じ？」

「・・・ハルキは？」

「待ってるよ、ずっと。田辺くんが携帯の電源入れてくれるの。」  
手に握ったままの携帯に視線を落とす。なんか、ここで電源入れた



ら負けって気がしねえ？

「けっこー、頑固？」

「なんで、都築さんがココに来たの？」

「んー、誤解させた責任みたいなのあるし、それに、仔猫ちゃんをほつとけないし。」

極めつけは、ハルキの馬鹿がスゲー凹んじゃって・・・で、オレの出番かって。」

凹んだ？あの自己中のハルキが・・・凹んでんの？

こんなことぐらい、軽く笑ってんじゃない、ハルキなら・・・

「アイツ、あれでもさー、マジ情けないくらいウサギちゃんなわけ。」

「ウサギ？」

ヤツは、ニヤニヤと笑った。オレがコネコなら、ハルキはウサギ？なんだよソレ。

「そーだよ、1人だと寂しくて死んじゃうーみたいなヤツ。」

「んなわけないじゃん！」

「知らないの？アイツ、いつ田辺くんに捨てられるかってビクビクしてんだから。」

ダレが本気にするかよ。

あのハルキが、捨てられるってビビってたなんてさ、笑えるじゃん。いつもほったらかしで、自分ばっか遊んでるくせに。

「今も、ひざ抱えて丸まってんじゃない？」

そんな情けないハルキ、ホントのハルキなわけないじゃん。

何にもわかってない、コイツ。

こんなヤツにハルキのこと、とやかく言われたくない。言わせない。

「アイツとなんか別れて、オレと付き合わない？」

「うつせーよ、なんだよオマエ、さっきから勝手なことばっか言ってるじゃねーよ。」

「オレ、マジで言ってるんだけど。」

そう言ったヤツの横顔は、うつとりするくらいキレイだった。その真剣な瞳に吸い込まれそうになったのは、認めてやる。オマエのこと、ちよつとは気に入ってたのホントだし・・・

あんなの目の前で見せ付けられるまでは、ホント機会があればって思ってた、けどだ！

オレは、オマエとハルキの関係が気に入らないんだよ。

「エイコが感謝してた、田辺くんに助けられたって。自分を見失ってたの、気が付いたってさ。」

「エイコと話した？」

「さつき携帯で、ゴメンって謝ってきた。オレもさ、友だち以上の気持ちは無いって話をしなきゃいけなかったんだけど、エイコが自分で気が付くの待ってたんだ。じゃないと、同じこと繰り返すだろうあの手のオンナは。」

ヤツの真面目さっていうか、優しさに、素直に驚いていた。

友だちに対して、そこまで真剣に思うだろうか？そこまで、相手のこと考えるだろうか？

フツーなら、ウザいぐらいで無視して終わる。好きでもない相手に言い寄られたら、尚更なんじゃね。

「オマエ、だからオレがココだってわかった？」

「まーねー、ハルキは今でもあちこち駆け回ってんじゃね。放課後の約束、エイコぶつちすんのに、すっぱかしちゃったし。せつかく二人っきりで話すチャンス、オレが見逃すとも思う？まさか、この格好で告白するなんて思いもよらなかったけど、ま、いいかなって。」

ええ・・・今、サラリと何か言っていない？結構、ドキドキしちゃうようなこと。

コレって夢？

オレ、寝てんの？

「ハルキとのことは知らなかったけど、結構前から、田辺くんを見てたんだから。」

オレとしては、ハルキに持ってたかたーっていうのが正直な気持ち・  
・出遅れた。」

「な、なんでオレなの？」

「好きになるのに、理由が必要？」

「ない……。好きになるのに、理由なんていらぬ。ハルキを好き  
なのに、理由なんてないもん。それと同じ気持ちを、コイツも抱い  
てる。」

「ちよつとは脈アリだつて思つてただけどな、さっきのでシクつ  
たね。」

「じゃ、本当にハルキとは……」

「だから、ただのトモダチ。今、大学が忙しいんだつて？バイトも  
してるだろ、朝、間に合わないとかなんとか言つてた。ウチ、大学  
の近くなんだ、それで、泊めてやつてただけなんだから、変に勘ぐ  
るなよ。」

「そうなんだ……」

「話してなかつたハルキが悪いつて、オレ、ちゃんと叱つといたか  
ら。」

「うん……」

手の中で携帯を転がしながら、軽くなつた胸で楽に呼吸する。  
頬に、ポツリと小さな雨だれが落ちてきた。雷もずいぶん近くなつ  
てる。

「ウチ、来なよ。その方が、ゆっくり仲直りできるしさ。」

「なんでそんな……」

「惚れた弱みつてやつ？好きな子には幸せでいて欲しいじゃん。」

「マジ？」

「マジで。」

ヤツは素早くオレの手の中の携帯を奪い取つて、電源を入れた。  
途端、鳴り響く着メロ。

「ほーらね、ウサギちゃんビクビクでしょ？」

「ホントだ。」

「やっと笑った。」

「・・・。」

「早く出な。」

都築さんから受け取った携帯は、まるでハルキが泣いてるみたいに鳴ってる。

「もしもし・・・。」

「リヨウ！今、どこ？」

「公園。」

「あ、」

都築さんは、急にオレの手から携帯を取り上げた。

「いいか、これ以上泣かせたら許さないからな、今からウチに連れてくから大人しく待ってる！」

そうハルキに怒鳴って勝手に切ると、携帯をポイと投げて寄こした。

「アイツにはイイ薬。」

「もー。」

参った。

この人にはかなわないかも・・・マジ、参ったね。

エイコがカノジヨは違うって言った意味、わかった気がする。そんな、カノジヨに惹かれる気持ちも。まだ、カノジヨの正体すら知らないけど、こうしているうちにずいぶん惹かれてるもんな。学校のカノジヨとは違う、もう1人のカノジヨの方に。

あの時の夢が、まさかこんな形で本当になるなんて、まさに正夢。

「行こ、ウサギちゃんが拗ねる前に。」

意地悪く笑うカノジヨにつられ、オレもニヤリと笑みをこぼす。

そして、オレらの大きな笑い声は、誰も居ない夜の公園に響いた。

きつと、今夜もまた、オレは夢をみる。

それが悪夢にならないことを、今から願っておこつ。

「ボクは夢をみる」  
(終)

## ボクユメ7（後書き）

「ボクは夢をみる」をご拝読いただき、ありがとうございました。  
ムーンライトノベルズBL系にて「久保トオル」が引き継ぎいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2146a/>

---

ボクは夢をみる

2010年11月11日07時42分発行